

「加点主義」で復活遂げた体操ニッポンとお入れ芸柔道

2004.10.20

久しぶりの金メダルラッシュに日本が沸いている。柔道、水泳といった個人競技に続き、28年ぶりに団体総合で金メダルに輝いた体操男子の活躍は、かつて5大会連続で五輪を制した体操王国ニッポンの復活を強烈に印象づける結果となった。

100分の1秒単位で記録を競う陸上や水泳、得点で勝ち負けを決める球技などと異なって、審判の採点で勝敗を分ける体操は、採点の方法そのものが重要な意味を持つ。

今回のニッポン復活は、「加点主義」の採点法に備え、選手選考から徹底して「加点主義」で臨んだ日本体操界の戦略的な勝利にほかならない。加点主義という名の減点主義が横行する企業社会に身を置く一員として、彼我の格差に思わずため息が漏れてくる。

難度の高い技に挑まなければ高得点は得られない

男子体操陣の活躍そのものは、既にテレビや新聞で何度も目にしているはずなので、ここでは採点法のおさらいをしておこう。

日本体操協会の資料によると、28年前のモンテリオール五輪で10点満点を連発し、白い妖精の異名を取ったナディア・コマネチ選手(ルーマニア)時代の10点と、現在の10点では中身が異なっている。

現在の採点法を簡単に言えば、10点満点のうち8.8点までが基礎得点で、残り1.2点は難度の高い技を成功させた場合のみ加算される加点部分になっている。そのため「失敗した選手が失敗のない選手より得点が高くなる」現象が起きてくる。

「ノームス」が10点満点の条件だったかつてとは様変わりして、加点の全くない演技を完璧にこなしても、8.8点にしかならない。10点満点を狙うには、難度の高い技を豊富に取り入れて演技せざるを得ない。

残年ながら日本勢がメダルを逃した個人総合で、米国のポール・ハム選手が最後の鉄棒で高難度の演技に挑み、見事に逆転優勝したのも、この新しい採点法だからこそだ。

さらに日本体操協会のホームページに掲載されている「オリンピック・アテネ大会代表選手選考基準」を読むと、興味深い事実が浮かび上がってくる。

ホームページによると、代表選手6人を選考する際に、単純に個人総合の上位6人を選抜するのではなく、5人目と6人目の選抜には日本の弱点種目と言われていたゆかと跳馬を優遇するポイント加算方式を採用したという。

この結果、個人総合7位の選手が6位の選手を逆転して代表に選ばれて、結果的に金メダルをもたらしたのだから、体操協会の英断が実を結んだというしかないだろう。

柔道はルール変更で「技の切れ」の勝負に

採点競技ではないものの、初日からメダルを量産しているお家芸の柔道でも、事実上の加点主義が日本勢の追い風となっている。

欧州勢が国際ルール運営の実権を握ってきた柔道では、一昔前には腰を引いて防戦一方で相手の反則を狙う、悪しきポイント主義がはびこっていた。

お互いに何も技が決まらないまま、審判の旗判定による印象点で勝敗が決まる試合など、見ていて後味の悪い思いが残ったのは否めない。

今回の五輪では、かつてのような消極的な試合運びがすっかり姿を消している。技をかけない消極的な試合運びに対する反則や、技をかけたふりをして防御に回る「かけ逃げ」に対する反則を厳格に取るようになったために、技の切れで勝負する本家日本の選手が相対的に有利になったのだ。

逆に金メダル確実と見られていた井上康生選手が4回戦で一本負けを喫したのも、積極的な試合運びが求められるようになったことと無縁ではないはずだ。

スポーツの世界では、「欧米主導のルール変更で日本が不利になった」という論評を、しばしば目にした時期がある。完全に否定しきれない面はあるものの、体操や柔道のルール変更で代表されるように、欧米主導のルール変更は、最終的には「競技を面白く見せる」ための方法論にたどり着く。

競技を魅力あふれる内容に変えて、観客の目に面白く見せるための試行錯誤を繰り返した結果、「リスクを冒さない選手は栄冠をつかめない」というスポーツの原点に回帰する結果となったのは、極めて興味深い。

採点法によって演技が変わるのは企業社会も同じ

ビジネスパーソンと五輪選手を同列に論じることはできないものの、両者に共通しているのは、「採点法に合わせて本能的に演技の仕方が変わってくる」点ではなからうか。

腰を引いた方が金メダルの確率が高まるのなら、柔道選手は皆腰を引いて構えるようになるし、ノーマスが10点満点の条件なら、体操選手はミスのない機械のような演技を目指すようになる。勝てない理想論など、選手にとっては何の意味もないからだ。

実業の世界でも、「失敗した選手の方が失敗しない選手より点数が高くなることもある」査定を確実に実現していけば、企業社会を覆っている閉塞感も、いずれは解消に向かっていくに違いない。

アテネ五輪の終了とともに、加点主義によるニッポン復活が「真夏の世の夢」となって霧消してしまわないことを願うばかりである。

(寺山 正一)

(日経ビジネス副編集長。電気、自動車など主要産業を担当。
ニューヨーク支局駐在、格付け投資情報センターでのアナ
リスト業務も経験)